

## 大山町での情報の活かし方

所属 環境農学専攻 森林保全学研究室

学年・氏名 修士2年 増田 治美

(株) おおやま夢工房

1月に講義が1日あり、講義全体の目的である創発とナレッジマネジメントの理論を学んだ。2月に大山町を訪問し、町の方からお話を伺ったり、梅酒・梅干し製造の現場を拝見したりした。その後、大山町が抱える課題とそれについての解決策を班ごとに考え、3月、再び大山町に行き提案を行った。それらを通して社会に出て必要となる知の管理・活用の仕方を学ぶ、という講義だった。

まず大山町の紹介をしつつ、そこから学んだことを述べる。

農業を基幹産業としてやっていくことは困難な時代だ。その中で大山町は、加工により梅に付加価値をつけることで収益を上げることに成功した。梅干しで成功する大元になったのは、地元テレビで町興しの策を募集したときに出た、ひとりのおばあちゃんの「梅干しコンテスト」の提案だったという。

双方向型のメディア活用による知の共有・発展のさせ方、小さな提案を掬いあげて実行に移す行政の行動力、それらナレッジマネジメントの実践が全国一の梅干しにつながった。また、町を引っ張る方々は、緻密な情報収集とそれに基づく先見の明、奇想天外にも見える大胆な発想、それを伝えていく力をお持ちだった。知識が知識を生んでいく、町民の行動や生活につながっていく、そういう反応を促す力であった。

その他、リーダーのガキ大将的な行動力と俯瞰力と魅力、コンテストに落選しても7年間挑戦し続けたおばちゃんたちの負けん気、相手の情報を徹底収集し喜ばせ協力をもぎ取るノウハウ、おちこぼれには旅をさせる教育法など、学ぶものは多かった。それらはドラマのようで聞いていて楽しかった。

以下は、提案を練る過程を通して気付いたことだ。

私達の班は「梅の成分分析を私達と一緒にやりませんか」と提案した。梅の町、大山をより良くする可能性を最も強く感じたのは、やはり、「梅の香り高さ」であったからだ。「問題の解決」というよりは、その「良さを活かす」。そしてまた町民の方が大学という研究の場に期待して頂いていることも知り、「研究機関としての大学を活かす」提案を、と考えた。

(尤も、大山町夢工房梅酒開発顧問の方の助言をそのまま用いさせて頂いてしまったのが…もっと早くから動きだせばこれを発展させた提案ができたろう、そうすべきだったと思う。申し訳ないし悔しい)

ここで行ったのは、大学院で研究を通して学んでいることと基本的に同じであった。

「問題を見つけ、解決に必要な情報を収集し、その情報をもとに妥当な解決案を考える」社会に出るために必要な能力は、研究に必要な能力と根幹部分は変わらないと知った。未熟さを痛感するとともに、今やるべきことをめいっぱいやることで鍛えられると思った。

しかし、社会にでたら特別重要なのに今のままでは身につかない、という危機感を覚えた能力もある。社会では問題を探すのにも何かを提案するのにも絶対必要な「人と情報をやり取りする能力」である。

気付いたのはまず課題を探るとき。現場で情報を拾ってくるには、人の話を引き出すこと、つなぎをとることが一番重要であったが、自分の下手さ加減に呆れた。夢工房の支配人は人から情報を盗もうという意欲がすさまじかった。また、逆に人に何かを伝えるのも上手だった。よってお話が楽しい。私もこの精神を盗もうと思った。

それから班員で議論するとき。

複数人で仕事に取り組む以上、認識を共有し、全員を活かすことが重要だ。議論を通して個々の考えが相互作用を及ぼしあい、一人ではできない提案を練り上げることが議論する意義だ。

なのに私は、議論を荒立てないことに固執し、生産的な説得力のある意見を過ちなく伝えるように言う努力を放棄していたこと、集団の意見を自分の意見とする責任感が欠如していたことなどに、今回ようやく気づけた。大山町の方々から期待を頂き、班員全員で必死に考えられたおかげである。また、改善しようとするあまり攻撃的になったり勝手をしたりと、同班の方々にはご迷惑をかけてしまったけれど、最後まで一緒に考えさせて頂いたことで一歩前進することができた。ありがたいと思う。

現在は、これらの気づきをもとに「なるべく現場に出て人と話す」「議論の場・相談の場をもっと設ける」「反対意見や展開を促す意見を生産的に言う(質問で遠まわしにしか言わないのは逃げなのでやめる。単なる同調も生産的ではない)」「集団で意見をまとめるときには、その結論に責任をもつ。」などに気をつけ、森林組合に出向いたりゼミでの発言を行ったりしている。

大山町という素敵なフィールドで学ばせて頂いたことは、私にとって貴重でした。それを社会に活かしていけるよう努力します。大山町の方々、支援室の皆さん、班員の方をはじめ受講生の方々に感謝しております。